

P. L. バーガーの「媒介構造」論について ——バーガー社会学における行為論的「主体化」契機の可能性——

吉田 幸治*

本論考では、アメリカの現象学的社会学者P.L.バーガーの現代社会論的取り組みである『故郷喪失者たち』、及び1970年代後半以降の著作に散見される「媒介構造」論に注目し、彼の社会理論的業績である「現実の社会的構成」論との関連で論じることによって、バーガー社会学において行為論的「主体化」契機が見いだされることを明らかにする。バーガーは現実構成論において、人間と社会が相互に作用しあうことによる双方の弁証法的な構成を主題とした社会学理論を構想していた。しかし彼の「弁証法」は社会を動的に捉えうるための具体的な「矛盾」が不確かにしか想定されていないため、彼の社会理論を認知主義的な傾向を持つものとしている。これに対して、彼の現代社会論的取り組みにおいては、人間の側からの社会産出を示す「主体化」の契機をうかがわせる主題が設定されている。特に「媒介構造」論では具体的な中間集団が分析の対象に据えられており、このことによってそれまでの意識内在的なアプローチを主軸としていた彼の社会学に対して、行為論的次元を含みもった社会学へと展開させる可能性をもつものとなっているのである。

キーワード：媒介構造 行為論的「主体化」契機 公的領域と私的領域 正当化

目次

はじめに

～「主体化」契機の問題を巡る論点整理～

- 1.『故郷喪失者たち』に見いださる「主体化」の契機について
- 2.「1970年代後半以降の著作（媒介構造論）」に見いださる「主体化」の契機について
- 3.「媒介構造」論と現実構成論との関係について

はじめに

～「主体化」契機の問題を巡る論点整理～

本論考では、アメリカの現象学的社会学者P.L.バーガーの現代社会論的取り組みである『故郷喪失者たち』、及び1970年代後半以降の著作に散見される「媒介構造」論に注目し、彼の社会理論的業績である「現実の社会的構成（the social construction of reality）」論（バーガー現実構成論）との関連で論じることによって、バーガー社会学がもつ理論的豊かさの一端を開示する。バーガーの現実構成論は、彼の師

*立命館大学大学院社会学研究科博士後期課程

であるA.シュッツの現象学的社会学を礎としつつ、その現象学的視角を人と社会の弁証法的枠組とともに理論化し、新たな社会学的分析枠組として提示したという一定の評価がなされている。しかしながらその一方で、彼の現実構成論がもつ認知主義的な傾向によって、社会の動態的な側面を十分に捉えうるような社会学理論としては必ずしも成立していないという側面をもつ。そこで本稿では、そのようなバーガー現実構成論の問題性を行為論的見地の不十分性とした上で、それを補完しうる行為論的「主体化」という論点が、主に彼の「媒介構造」論のうちに現れていることを明らかにしたい¹⁾。

このバーガー社会学における行為論的「主体化」という論点を問題とするにあたり、まず最初に確認しておかねばならないのは、彼の初期的取り組みに見られる人間的「自由」の称揚である。彼の初期的代表作である『社会学への招待』（1963、以下『招待』と略記）は、彼の社会学が当時の支配的パラダイムであった機能主義理論に対抗する意図を持って登場してきたことを如実に示すものであり、その後に彼が上梓する「現実の社会的構成」論の性格規定を考える上で非常に興味深いものとなっている。彼はこの『招待』での「ドラマとしての社会論」の記述において、意識の脱自明化（意識の自由）に関する積極的提言を行っており、さらにはそのような人間的「自由」を含みもつ社会学の可能性について言及している。すなわちバーガーは、社会生活が人々の「共謀の所産」として意味的に規定され、その規定が自然的態度によって自明視されていることを論述しつつも、最終的には人間が本来的にもちうるとされる「自由」性（脱自明化する意識の存在）を主張することによって、彼が考える社会学の基本的なあり方

についての表明を行っているのである。

このようにバーガーは自らの社会学論を展開した『招待』において、自由を積極的に評価する動的な社会理論の構想を示唆的に提示している。そして事実、彼の「現実構成論」では、「人と社会がともにつくり・つくられる」という理論的テーゼが掲げられ、人間と社会が相互に作用しあうことによる双方の弁証法的な形成を主題とした社会理論が展開されるのである²⁾。ところが、先にも触れたように、彼の現実構成論はその内実において、本当に人間と社会の弁証法としてその関係を捉えうるような動的な社会理論たりえているのかという疑問が生じている。この点については筆者の別稿において詳しく論じているので繰り返さないが、以下、彼の現実構成論における行為論的見地の不十分性という問題にのみ即すかたちで簡単に論点を確認しておきたい。

「現実の社会的構成」論が主題的に論じられているのは、①論文「物象化と意識の社会学的批判」（1965）、②『日常世界の構成』（1966）、③『聖なる天蓋』（1967）の三点である。この三種の内容を吟味していくと、①から③へと時期が下るごとに、バーガーが『招待』のなかで述べるような社会の動態的側面を捉えうる社会学理論となりえていない事が明らかになる。というのも、たしかに①において提示されている現実構成論では、社会構成の説明に際して行為論的－認識論的次元が明確に区別された理論図式（説明概念）が採用されているのであるが、②と③ではその区別が消えて、社会構成の様態を認識論的次元にのみ限定した説明図式となっているからである。また①においては、自明視された社会的現実を解体する「脱物象化」の契機という、『招待』に見られるような社会を動

態的に捉えるテーマが主題とされているが³⁾、②と③ではそのような主題が設定されず、言語を通じた行為の類型化によって現状の世界がいかに構成・維持されていくかの説明に終始している。すなわちバーガーのいう「弁証法」がその理論設定において、現実の社会状況に見いだされるべきはずの葛藤状況、いわゆる「矛盾」を不確かにしか設定していないため、この点の曖昧さによって彼の描く社会像が一元的かつ静態的なものになってしまっているのである。この点については、バーガーが②と③において、社会的行為に関する説明を行為選択の「負担免除」の側面に矮小化して捉えたこと、またさらには、個人が社会において有意義的な行為を行う前提としての「社会化」が強調されすぎるあまり、個人の主観的現実と社会の客観的現実の「調和 (symmetry)」が前景に来てしまったことを意味している。すなわち、バーガーの現実構成論においては全体としての社会が意味的に存立している側面が強調され過ぎ、初期のバーガーが本来想定していたと思われる社会の動態的側面への着目、新たな意味投企によって別様の社会が立ち現れる側面への着目が後景に退いてしまったのである。そしてこのような現実構成論の問題性は、バーガーが最終的な社会の存立を自明視された行為の類型化＝物象化という図式のもとに理論構築していることを示してしまう事になり、これらの点について、彼の社会学における行為論的見地の不十分さとして問題性を指摘することが可能となるのである。

以上までが別稿において論じたことであるが、本稿では、バーガーの現実構成論は上述のような問題性を抱えつつも、それを克服しうる要素が彼の理論的知見自身の中に含まれていることを明らかにしたい。すなわち、現実構成論

において副次的に言及されている「アイデンティティ論」、及びこれとの関連で彼の現代社会論的取り組みに注目することによって、先に指摘した「矛盾」がバーガーの社会学の中にも想定されうることを示し、それによってバーガーの現実構成論が理論的に補完されうることを明らかにしたい⁴⁾。

具体的には、まず第一章において、彼の「アイデンティティ論」における「社会化された自我」と「社会化されない自我」との「葛藤」の指摘に注目する。そしてこれを個人における様々な意味世界の遍歴という彼の現代社会論とともに理解することによって、矛盾を媒介とした新たな「主体化」の契機が立ち現れることを確認する。さらに『故郷喪失者たち』(1973, 以下一部を除き『故郷』と略記)以降の現代社会論的取り組みにおいて、現代社会における公的領域と私的領域の二分化を軸とした「社会的生活世界の多元化 (pluralization of social life-worlds)」という主題が設定されていることに着目する。バーガーは現代社会においては、私的領域での人々の現実構成の営みこそが重要視されなければならないと考えている。つまり現代人は複数の社会的生活世界を遍歴しなければならないという「選択の自由」を引き受けた上で、自らのアイデンティティとその周りの世界を「主体的」に構成していかなければならないのである。

さらに第二章では、このような現代社会論的主題の一環として現れてくる「主体化」の契機に加えて、70年代後半以降、「媒介構造」を通じた私的領域からの公的領域への働きかけというテーマが論点化されていることを確認する。そしてこの論点こそ、『故郷』までの意識内在的な現象学的次元を越えて立ち現れてくる行為

論的な「主体化」契機の問題と関わることを明らかにする。

このようにして、第一章及び第二章においてバーガーの現代社会論の特徴的变化（『故郷』と「1970年代後半以降の著作（媒介構造論）」の変化）を見ていくことによって、①現代社会論の主題として、②理論レベルとして（現象学的次元から行為論的次元へ）、彼の社会学に主体的契機が見いだせることを明らかにしたい。そして最後に、本稿によって示されるバーガーの「媒介構造」論の理論的意味を彼の現実構成論との関連で捉え直すことによって、自己内の「葛藤」という問題が他者との、あるいは集団間の「葛藤」の問題へと場面を転じることであり、それによって彼の現実構成論がよりリアルな社会的行為論の次元をも表現しうる社会理論となることを明らかにしたい。

1. 『故郷喪失者たち』に見いださる「主体化」の契機について

バーガーは現実構成論での「内在化（internalization）」に関わる叙述の中で、「社会化された自我」と「社会化されない自我」との間に「内的な対立（internal confrontation）」が存在すると指摘している。彼は、社会が個人の意識内において獲得される「内在化」の過程に伴う重要な随伴の様相として、個人の意識内に「社会化されたものと社会化されないものとからなる意識の二重性という性格をもたらす」⁵⁾とし、そのうえで次のように述べている。

「意識の二重性は、外的な社会と個人の対立を意識そのものの内部で繰り返しながら、自我の社会化された部分と社会化されない部分とのあいだ

の内的な対立という結果になるのである。どちらの場合も、それぞれの二要素が機械的な因果の関係とならず、むしろおたがいを繰り返し連続的に産み出し合うのである限り、その対立は一種の弁証法的な性格をもつ。そのうえ、自我の二つの部分はたがいに内的対話をかわすことができる」⁶⁾。

この「自己葛藤」の問題に関するこれ以上の掘り下げた記述は現実構成論では見あたらないが、少なくともこのような葛藤に関する指摘が、個人の意識レベルにおいて別様の現実が構想される一契機を述べている事は確かである。すなわち、個人の意識レベルにおいて自らの自己同一に関する「矛盾」の想定が行われているのである。そしてバーガーは、現代社会を個人が複数の社会的世界を遍歴していく「態度変更（alternation）」の時代として捉えており⁷⁾、上述のような自己内の葛藤状況が起りやすい時代であることを指摘している。バーガーは1973年に出版された『故郷喪失者たち』の中で、現代人の特性に関する叙述として、①アイデンティティが細分化（differentiated）されている点、②アイデンティティが自己反省的な（reflective）性格を持っている点について指摘している⁸⁾。この二点の指摘は意識レベルでの「主体化」の可能性という点から重要である。というのも、①の特性によって、個人の意識内における複数の社会的自己が広範に獲得されるからであり、また②の特性によって、これら獲得された自己が意識内部において反芻され、場合によっては新たな行為的契機が生まれうるからである。特にこの②の特性は非常に重要である。なぜならば、アイデンティティの自己反省的な性格の高まりによって、個人の意識内における複数の自己間の対話や葛藤が促進されるとともに、一個人内では処理しきれない問題につ

いては、それに対する注意深い知的理解とともに、他者と共同して問題解決にあたらねばならないとする意識が芽生えるからである。もちろん、個人内において感知されるすべての問題状況が外部への働きかけになるわけではないが、人間が違和を感じる問題状況というのは、社会が抱える問題状況に連関する場合が多いと言えよう。

以上は別稿でもすでに指摘した主体化契機の論点であるが、しかしそれは社会を動態的に構想しうる一方の側面、すなわち意識内在的次元にとどまるものであった。それに対し、人と社会を弁証法的に捉え、人間の側からの社会産出という側面を具体的なものとして構想しうるためには、意識内在的次元での主体化契機に加えて社会が他者との関わり合いを通じて構成されていく側面、すなわち行為論的次元での主体化契機が問われなければならない。ただしこの点は続く第二章において論述することにして、以下ではさらに、『故郷』において示されるバーガーの現代社会論の主題に現れている「主体化」契機について確認していきたい。

まずこの『故郷喪失者たち』の基本的な性格について改めて確認しておきたい。本書はその副題である「近代化と意識（modernization and consciousness）」が示すとおり、近代に特有な諸制度、なかでもバーガーとその共著者達⁹⁾が最も重要なものとする「工業生産（technological production）」と「官僚制（bureaucracy）」を分析の出発点に据えながら、これらが現代人の「意識」にどう影響を及ぼし、結果どのような「現実」が人々によって構成されているかを論じたテキストである。また彼らはこのテキストにおいて、現代社会の特性を示す基本的な形態を上記の「工業生産」と「官僚制」を中心とした「公的領域」の世界と、それらに影

響を受けつつも人々の「生活史設計（a life plan）」¹⁰⁾によって独自の世界を構築しようとする「私的領域」の世界に二分化した社会と捉えている。このような「公私の二分化」という側面から現代社会を捉えて論を展開するという発想そのものは、とりたてて彼らのオリジナルというわけではない。にもかかわらず彼らの現代社会論にある種独特のものとしているのは、これら公私それぞれの領域があくまで人々の現実定義によって構成されるという、「現実の社会的構成」論以来のバーガーの理論的立場を継承し、公私領域を共に個人の意識のあり方という側面から論じているからである。もっとも後に確認するように、『故郷』においてはそのような意識内在的な現象学的次元による分析が前提とされつつも、それとは違った分析枠組みが混入している。そしてそのことが、『故郷』でのバーガーの現代社会論的取り組みにおいて、「公私の二分化」を動態的なものとして扱っていないことを如実に示すものとなるのである。しかしこの点は本章の最後に確認することにして、彼らが現代社会における公私の領域をどのように整理しているかを確認したい。

彼らはまず本書第一章「工業生産と意識」の冒頭部分において、「今日の産業の平均的な労働者の立場」¹¹⁾に立った上で、「工業生産に必ずともなう、欠くことのできない知識の構造（organization of knowledge）とはどのようなものであろうか？」¹²⁾という問いを立てる。すなわち工業生産に関わる人々が持ちうる知識の構造に焦点を当てつつ、それらの知識の構造によって構成されるこの工業生産の領域の特徴について論述していくのである。またこれと同じように、第二章「官僚制と意識」においては、統制的官僚機構にやってきた利用者の意識に焦

点を絞り¹³⁾、その利用者によって構成される官僚制の領域の特徴について論述していく。ここでこれらの工業生産と官僚制の領域の特徴を端的に整理すると、工業生産の領域では①合理性②寄木細工性③多相関性④実行可能性⑤多元性⑥革新性となり¹⁴⁾、官僚制の領域においては①社会そのもののテーマ化（社会が操作可能なものとして理解されること）②多元性の脅威を緩和する方法としての官僚制のテーマ化と条文的行為（社会の多元化に伴う体験や意識の多様性に対して、官僚的分類によって秩序化を行うような意識のあり方）③ある特定の管轄範囲を私的領域へと「配置」すること（公私の分離）④人権が官僚的に規定しうる権利に関連づけられるという考え方（官僚機関はある特定の人権について責任があるとの理解とともに、これと関連して適切な手順こそが重要であると理解されること）となる¹⁵⁾。そしてこれらの公的領域における現実定義の諸特徴は、近代化の進展に伴う「匿名性（anonymity）」の増大、個々の社会的場面の没個性化という性格を強く含んだものである。それゆえ人々は、私的領域を公的領域からの避難場所として対抗的に構成しようとする。すなわち、「私的領域を、統一的で持続的な意味秩序の得られるように、調整しようとする。いいかえれば、人は、社会の中で自分の生活の意味の中心となりうるような『ホーム・ワールド』を築いて、維持しようとする」¹⁶⁾のである。ここで言われる「ホーム・ワールド」とは、現代社会における生活領域の細分化やそれに伴う自己の意味づけの不安定さに対して、再び世界に対する全体的認識を取り戻すことによって「安住している（being at home）」感覚が得られるような場である¹⁷⁾。このようなバーガーの私的領域への安定性の期待は、現代人が

公的領域からの個人の自律といった近代的自由を獲得しながらも、自己の立脚する意味的基盤をやはり依然として私的領域における自らの主観性の中に求めなければならないことを強調するものである。

ところが本書では、現代社会においてそのような親密な人間関係を保持しうるはずの「私的領域」がきわめて不安定な構造しかもち得ず、個人がそこに安住できるような「ホーム・ワールド」など容易には構築し難いことが繰り返し強調される。バーガーらは現代社会の特殊性を、既述のように「社会的生活世界」の多元性に求めている¹⁸⁾。そしてこの、個人が生きていく上で必要な意味付けが与えられる場としての「社会的生活世界」は、公的領域と私的領域の二分化を軸としつつそのそれぞれの領域内部においてさらに多元化が進展していくとされるのである¹⁹⁾。そして結局のところ、このような「社会的生活世界の多元化」がもたらす状況の困難性を、バーガーらは「安住の地の喪失（homelessness）」という言葉で捉え、以下のように述べるのである。

「近代社会の多元化的構造は、ますます多くの人びとの生活を、渡り鳥的で変化の絶え間ない動的なものにした。日常生活において、近代の人間は、非常に差異のある、しばしば相矛盾する社会的文脈の間で、絶えず変身を行っている。生活史という時間的關係から見ても、多様な社会的世界の間をつぎつぎと移動している。近代社会のますます多くの人間が、その生まれたときの社会的環境から根こそぎにされているばかりでなく、そのうえ、その後にくどくど環境も、真の『安住の地』となることに成功しない」²⁰⁾。

すでに述べたことではあるが、バーガーらはこのような状況に対して私的領域こそがその

「解決策」となることを強調していた。彼らはその一方で、私的領域がかかえる制度化の不十分さという問題性によって、この「解決策」がある種の限界を持つことをも指摘し、私的領域に対して両義的に評価するのである。この点は彼らの現代社会認識を表すものとして重要なので、視角を変えてもう一度検討しておきたい。

バーガーらは、公的領域によってもたらされる現代人の不満への解決策を、「個人の社会的かわりを、私的領域と公的領域に二分化するとともに、生活の特別な、はるかに隔絶したセクターとして、私的領域を形成すること」²¹⁾に求めている。そしてさらに、「私的領域は、近代社会の巨大な機構の生みだす不満を補償するような意味や活動を提供することによって、一種の平衡機関としての役割をはたした」²²⁾とも述べる。すなわち現代人は、この私的領域において、公的領域では抑圧されていた非合理的衝動を表現することができるし、またそこでの個別的な私的アイデンティティによって、公的領域での匿名化の脅威からの防波堤とすることができるのである²³⁾。ここで重要なのは、そのような私的領域の「内在的欠陥」、すなわち制度化の不十分性が指摘されていることである。つまり彼らは、「私的領域は、人間の活動を、確固として頼れるほどに組織立てるような制度に欠けている」²⁴⁾と述べ、かつての宗教のような包括的な意味秩序のもとに人々を安定的に意味づける制度の欠落を指摘するのである。さらにこの指摘は、単に制度による個人への意味づけの不十分性という問題にとどまらず、現代人にとっての「自由」の意味問題という論点へと密接に関係付けられることとなっているのである。すなわち、現代社会とはこうした制度が衰退した時代であるため、現代人は自らの意

味づけや行為の選択に際してそれを代替的に遂行しうる機関を持ちえないことになり、自分が存在するために必要な意味と安定を自らの主観性のうちにつかみ取らなければならなくなるからである。

「個人は、自分自身の特殊な私的生活を組み立てることのできるきわめて大きな自由を与えられており、…＜中略＞…この自由の範囲は明らかに満足感を与えはするが、同時にきびしい重荷をも課する」²⁵⁾。

こうして彼らにおいて、現代社会における私的領域は「個人にとっては、比類なき自由と不安の領域になった」²⁶⁾と捉えられることになる。すなわち、現代社会における制度の弱体化という時代的側面によって個人が公的領域から解放され、「選択の自由」に基づく私的領域の主体的意味づけが可能になった一方で、その根拠を個人の主観性に深く内在した実存的部分において求めなければならなくなるのである。したがって、現代人は自らが構成したものについて、常に不安にさいなまれるのである。このような発想こそ、本書の主題として一貫されている、「自由の獲得と故郷喪失」という彼らの現代社会観を表すものである。この特徴において明らかのように、彼らは結局のところ、現代人による「自由」の獲得という側面にのみ焦点を当てるのではなく、その結果として不可避的にもたらされる負の部分、現代人の構成する私的領域の構造的な不安定性の指摘を優位させるのである。

このように彼らは、現代人が構成する私的領域の不安定さに目を向けるわけであるが、にもかかわらず筆者は、上記の引用文中で言われるような「自由」を、『故郷』での現代社会論的

主題における「主体化」の契機としてより積極的な方向で捉えたい。本書に収録されている補論「名誉という概念の衰退について」を仔細に読めば、上記のような積極的解釈を支持するような論述が見出せる。すなわち補論では、現代社会における制度の衰退がアイデンティティの危機をもたらすものとして指摘されながらも、それでもなお現代人のもつ「自由」の積極面が示唆されているのである。

彼らはこの補論において、現代社会²⁷⁾とは「名誉 (honor)」の概念が衰退して、かわりに「尊厳 (dignity)」という概念が著しく伸張した時代であるとしている²⁸⁾。ここで述べられる「名誉」とは、「貴族的な概念」と理解され、「社会の上下の秩序」に関連している²⁹⁾とされており、「生活 (existence) をある種の祖型的な行動様式 (archetypal patterns of behaviour) に関係づける企て」³⁰⁾のことである。またこのような「名誉」が意味をなす文化とは、本質的に前近代的なものとされており、その前提において個々人が何者であるかがあらかじめ規定されているような社会において意味をなすものである。それに対して現代社会とは、「名誉」に関する個々の意味内容とその土台たる社会構造の結びつきが暴かれ、もはや「名誉」自体が意味をなさない社会、すなわち「旧時代の名誉とその階層秩序的祖型の正体があばかれただけではなく、遂にはあらゆる名誉の概念を一掃するにいたる、人間と社会についての一つの新しい考え方が抬頭した」³¹⁾社会とされるのである。この点について、彼らはセルバンテスの『ドン・キホーテ』の例を持ちだすことによって現代社会の特性を描き出す。つまりこの物語は、「時代に束縛された暴露物語にとどまるものではない」のであり、その意義が「騎士道の

『狂気』を暴露するだけでなく、それを拡大して、自己を『祖型的な行動様式』と同一化するすべての試みの愚かさをも暴露しているところにある」とされる³²⁾。そして、「現代人は、これまで自己を包んでいた、色とりどりの旗をはぎとられ、一人の人間にすぎないということがあらわにされて死の床に横たわるドン・キホーテである」³³⁾と述べるのである。すなわちこの、死の床に横たわりながら展開されるキホーテの意識、「私は気が狂っていた…＜中略＞…私はかつてラ・マンチャのドン・キホーテであった。しかし今、私は、前にもいったように、かの善良なるアロンソ・キハノである」³⁴⁾という意識こそ、彼らの言う「近代意識」なのであり、この近代意識こそが、「まさにこの孤独な自己を、人間的尊厳と奪うべからざる人権の担い手として感知」し「正体を暴露された名誉の概念の残骸のまっただ中に尊厳を発見した」とされるのである³⁵⁾。つまりここにおいて彼らは、現代社会における制度の衰退が人々に実存的な不安をもたらすことの危惧を表明する一方で、制度から引き剥がされた孤独な自己そのものを尊重すべきとみなす近代意識が抬頭してきたことの歴史的重要性を指摘するのであり、以下にみるように、そのような近代意識の擁護を行うのである。

「現代の諸制度とアイデンティティの布置に対する留保なしの告発は、まさにこの（近代的意識の）布置によってのみなされた大きな倫理的達成—いかなる社会的位置づけをも乗り越えた人間的存在そのものに由来する尊厳を備えた自律的自己の発見—に気づかないでいる」³⁶⁾。

バーガーらはこのように述べた上で、「近代世界 (modern world) を単純に告発する人は、

とりわけ近代的な、人間の尊厳と権利の発見をも、告発しようとしているのかどうかを考えてみなければならない」³⁷⁾と警告する。筆者はこの警告を、彼らの現代社会認識に現れている、現代人は不可避免的に主体的たらしざるをえないことへの肯定的自覚の促しとみなす。なぜならば、現代世界に特有の「倫理的達成」とされる以下のもの、たとえば「社会の一番弱いものも、保護と尊厳の生得権をもっているという確信」³⁸⁾といった価値が、「近代世界に特有の（意識）布置なしには考えることのできない倫理的達成」³⁹⁾とされるからである。そしてさらに加えて、彼らはこれら数々の近代的価値を「拒否することは倫理的に考えられない」とはっきりと述べているからである⁴⁰⁾。そしてさらに、個人が制度から引き剥がされた現代という時代においてなお、「近代人の基本的達成である人間の尊厳の発見を具体化し、その安定化に成功するか否かということが、未来の制度とそれらに付随する名誉の規範の倫理的試練となるであろう」⁴¹⁾と述べることによって、現代的個人が構築する新たな「制度」の立ち現れを示唆するような言及も行っているからである。

以上、『故郷』でのバーガーらの現代社会論的主題において、いかにその「主体化」契機を見いだしうるかについて論じてきた。最後に、次章での「媒介構造」論における行為論的「主体化」契機の考察との関連において、『故郷』が理論レベルにおいては必ずしも十分な意味ではその主体化契機を見いだせない点について簡単に整理しておきたい。

『故郷』におけるバーガーらの理論的取り組みでは、他者との相互行為を通して（場合によっては自己の意図を越えて）社会形成が展開されていく側面を論点化しえないものとなっている。

なぜならば、意識内在的な現象学的次元に特化した分析枠組みによって現代社会における公的領域と私的領域の二分化の問題を主題化しているため、その「公私の分離」という社会状況が静態的にしか描きえない制約のもとにおかれているからである。すなわち、彼らが現代社会の「公私の分離」の問題を描くにあたって、一方で私的領域においては人々の意味づけによる社会構成という説明がなされているものの、もう一方における公的領域を形成するものが「工業生産」や「官僚制」とされ、これらが個人に対して外在する「客観的意味」をもつものとされているからである⁴²⁾。すなわち、バーガー現実構成論の現代社会論への援用とされている本書での現象学的理論枠組みであるならば、公的領域とされるものについても人々の定義のあり方によって構成されると捉えられるべきであり、公的領域であれ必ずしも「外的」で人々による再構成が不可能なものとは捉えられないはずである。にもかかわらず、人々の現実定義によって構成される公的領域のあり方とは別に、それらに対してある種の「限界設定」として現象学的次元を超えた「制度（工業生産、官僚制）」を混入させているため、結果として現代的な「公私の分離」の状況を動態的に捉えられないものとなっているのである。

このような『故郷』の理論的問題性は、人々の創発的な現実定義が実際に行われている具体的な社会的相互行為の場面が、不十分にしか想定されていないゆえの問題性と捉えることが可能である。そしてこの行為論的見地を十全に主題化しうるためには、次章で確認するように、彼の1970年代後半以降の現代社会論的取り組みである「媒介構造」論を待たなければならぬのである。

2. 「1970年代後半以降の著作（媒介構造論）」 に見いださる「主体化」の契機について

バーガーは私的領域について『故郷喪失者たち』においてまでは、その内在的な限界に留保を付けながらも、公的領域からの分離による現代人の私的領域での「選択の自由」の獲得という側面を指摘したり、あるいは近代化の進展に対する第三世界での反近代化運動や先進国の「青年文化」による脱近代化運動を、「制度化されない（underinstitutionalized）」領域における近代化圧力への「修正的効果」としての可能性をもちうるものとして指摘を行っていた⁴³⁾。すなわち「私的領域」をそのような場として、自律した諸個人による自由で創発的な現実定義によって構成される場として捉えられていた。しかし70年代後半以降の著作においては、むしろ私的領域をアイデンティティ形成の母胎となる具体的な社会集団として論じるようになる。つまり『故郷喪失者たち』において意識内在的な現象学的次元のレベルで描かれていた個人の定位する世界（『故郷』での「社会的生活世界（social life-worlds）」概念）の話が、アイデンティティの形成・維持に必要な資質をあたえる場としての「媒介構造（mediating structures）」という概念として展開されることになるのである。そしてこのことは、『故郷』における主題であった社会的世界に関する意味づけの問題そのものよりも、そのような意味づけが具体的に構成される場としての社会集団の問題に焦点が移ってきていることを表すのである。この「媒介構造」という論点に関しては、彼の現代社会論的な取り組みを示している1970年代後半以降の以下の著作、すなわち『To Empower People』（1977, with Richard

Neuhaus), 『Facing up to Modernity』（1977), 『Modernity, Pluralism and the Crisis of Meaning』（1995, with Thomas Luckmann）等を中心に論述されている。これまでバーガーの現代社会論的業績を表すものとしては、前章で論じた『故郷喪失者たち』が代表的にとりあげられてきたのであるが、そこで展開されている現代社会の記述概念は先に確認したとおり意味的な構成を強調した「社会的生活世界（social life-worlds）」概念が主軸であった。しかしながら上記で挙げた諸著作（『To Empower People』他）に示される「媒介構造」概念は、社会を構成する具体的な中間集団が指し示されており、その例として教会、家族、地域、自主団体などが挙げられている。筆者は、バーガーの現代社会論的取り組みに関するこのような変化こそ、バーガーの社会学の中でこれまであまり論じられてこなかった行為論的見地が主題化されうものと考えている。すなわち『故郷』までの「自由」の意味内容は、現代社会において「価値」に関する様々な選択肢が存在するという意味においての「選択の自由」が主題とされており、それゆえ主に意識レベルでの「自由」の問題に関わったものでしかなかったのであるが、「媒介構造」論の中で展開されている「自由」の意味内容は、ある任意の特定の「価値」が実際に獲得されることをもってして「自由」と言われており、しかも個人内在的な問題としてではなく他者を想定した集団的な問題設定となっているからである。それを以下、『To Empower People』における「媒介構造」概念の定義と対象、及びその特徴を見ていくことによって明らかにしたい。

この「媒介構造」に関するバーガーら⁴⁴⁾の定義は、彼ら自身が語っているとおりきわめてシンプルなものとして述べられている。

「われわれの媒介構造の定義はむしろ明快なものである。すなわち、個人の私的世界と、巨大な近代社会のインパーソナルな制度との間に立つ制度として定義される」⁴⁵⁾。

「この研究の目的にとって媒介構造とは、私的生活における個人と公的生活における巨大な制度との間に立つ制度として定義される」⁴⁶⁾。

そしてこの「媒介構造」によって彼らが意味する具体的な対象とは、以下のものである。

「われわれは以下の四つの媒介構造—近隣関係、家族、教会、自主団体—に焦点を当てる。…＜中略＞…これらの制度は二つの理由から選ばれている。一つはほとんどのアメリカ人の生活の中で重要な位置を占めるものであるという理由からであり、二つ目は、われわれが関心を寄せている福祉国家の問題にもっとも関連しているからである」⁴⁷⁾。

バーガーらはこのように「媒介構造」の定義と対象の設定を行うのであるが、この「媒介構造」概念について注目すべきは、彼らがそれを個人の信念 (beliefs) や価値 (values) が巨大制度へと伝えられることを可能とする媒体であるとしている点である。そしてさらに、この「媒介構造」によって個人は近代生活の疎外やアノミーから身を守ることが可能となり、また一方で巨大制度の方も、日常生活を送る人々の実際の生活を統治する価値と関係付けられることによって、その「正当性 (legitimacy)」を獲得することができるものとして位置付けられている点である。この点の指摘は、彼が「媒介構造」論を、私的領域からの公的領域への働きかけを論点化していることを表すものとしてきわめて重要である。

「個人の私的世界と巨大でインパーソナルな現代社会の諸制度は、個人の信念や価値が巨大制度へと伝達される媒体 (vehicle) を構成することによって媒介 (mediate) される。その媒体は上方と下方の両方で顔を向かい合わせた“二つの顔を持った (Janus-faced)” 制度である。そのような媒介によって、社会生活における上方—下方それぞれのレベルで利点がある。すなわち、それによって個人は現代社会におけるアノミーや疎外から守られるのであり、一方で国家を含む巨大制度の方も、人々の実際上の生活を律している価値と関係づけられることによって、その正当性を獲得するのである」⁴⁸⁾。

さらには、「民主主義」にとって必要不可欠なものとしての「媒介構造」という主張が以下のように展開されている。

「制度的に信頼できる媒介のプロセス (= 媒介構造、引用者補記) なしには、政治的秩序は個人の生活における価値や現実から分離してしまうことになる。政治的秩序の道徳的基盤を奪い去ることによって、政治的秩序は脱正当化される。そのようなことが生じた場合、政治的秩序は同意よりも強制 (coercion) によって秩序を確保しなければならなくなる。そしてそのようなことになれば、民主主義は消滅するのである」⁴⁹⁾。

「この分析的提案 (= 社会政策として媒介構造を助成するという提案、引用者補記) は、媒介構造が社会において価値を創造し、価値を維持する仲介者 (agency) であると想定する。この媒介構造なしには、価値は巨大構造、とりわけ国家の別の機能になってしまうのであり、そうなることは全体主義の特徴となるのである。全体主義のケースにおいては、個人は社会における価値普及過程 (value-propagating processes) の主体ではなく、むしろ客体となってしまうのである」⁵⁰⁾。

以上のようにバーガーは、この『To Empower People』において、社会の巨大制度と個人の生

活世界を結びつける場としての「媒介構造」という概念を提出し、その実例として具体的な社会集団である家族、近隣関係、教会、自主団体等を示すこととなる。確かにこのようなバーガーの主張を、アメリカ社会における既存の伝統的な価値の復権とそれによる社会統合の強調として捉える向きもある。すなわちバーガーのいう「媒介構造」を、社会の上位の価値の受容機関として、個人を一方的に造形する場としてのみ捉える解釈である。しかしながら上記の引用でも明らかのように、バーガーはこの「媒介構造」論において、上からの秩序の「正当化」ではなく、下から立ち現れてくる秩序の「正当化」の問題について論じている。そもそもこのテキストにおいては、福祉国家の巨大化に伴って人々の日常的な生活領域が専門家によって管理されることへの批判的認識が表明されており、そのような認識こそが、彼が「媒介構造」論を展開する上での前提となっている。バーガーは、社会の秩序の「正当化」の問題、すなわち「統治」のあり方の問題について、「我々はアメリカ人の経験における最上のもの、いわゆる自己統治によって特徴づけられる統治のあり方を強く支持する」と述べ、「国家が人々を指導するのではない。人々が国家を指導するのだ」と主張する⁵¹⁾。また、アメリカには「リトル・プラトーン（小集団）」という伝統があり、そのような集団を通して人々は日々生きる力を身につけ、「自由」の内に自らの社会を統治していく能力を獲得してきたとも述べる⁵²⁾。このような、人々による下からの自己統治というバーガーの社会理解においてこそ、個人の「主体化」という問題設定が如実に示されているのである。しかもこの「主体化」は、個人の意識内在的なレベルを超えた集団性を帯びていることは明らか

である。このように、「媒介構造」という具体的な社会集団を通した下からの「自己統治」という発想こそ、筆者が強調したい個人の「主体化」という問題設定が意識内在的なレベルを超えて集団性を帯びてくることを表すものとなるのである。

さらに重要なのは、「媒介構造」が多元的に存在しているという彼の現代社会認識である。バーガーは現代社会を、安定的で包括的な価値規範が成立しにくい多元化した社会と見なしている。そのような社会のもとでは、個人は直接に全体社会にむすびついて自己を意味づけることはできず、「媒介構造」としての具体的な社会集団を通してのみ価値を内面化し、自己を意味づけるのである。すなわち社会化の場としての「媒介構造」が、多元的に存在していることによって、個人は価値規範や意味秩序を、自らのものとして選択していくという問題が発生するのである。この問題は、現代社会に対するこれまでのバーガーの解釈にみられたように、様々な社会集団を遍歴することによる複数の世界了解の意識内在的な調整という問題圏にとどまることができないのである。なぜならば、「媒介構造」は単に個人の社会化の場であるばかりでなく、その中で他者とともに社会秩序の「正当性」を構築する場だからである。このような集団性を帯びた「主体化」の問題設定は、具体的な場面に置き直せば、他者との行為論的レベルの問題圏として理解可能になる。すなわち諸個人は、媒介構造における正当性の構築において、他者との具体的な関わりで、互いに価値を選択し、表明しあうという社会的行為を行わなければならないのである。

以上のように媒介構造論の意味内容を考慮することによって、これまでのバーガー理解では

不明瞭にしか確認されていなかった行為論的レベルでの「主体化」という問題設定が、立ち現れてくるのである。

3. 「媒介構造」論と現実構成論との関係について

最後に、上述した「媒介構造」論の展開によって浮かび上がる行為論的レベルでの「主体化」という問題設定について、これを彼の現実構成論との関係において整理すればどのように表現できるのか、簡単に概括して本論を終わりたい。

まず最初に、バーガーの現実構成論の理論的特徴として確認しておくべき重要な点は、①個人のアイデンティティは他者との相互承認によって形成・維持される点への強調、②個人のアイデンティティ形成と社会的生活世界の形成が同時進行的かつ不可分なものとして理論化されていること、この二点である。ここで重要なのは、バーガーの現代社会論においては社会的生活世界が多分化している点が強調されていること、すなわち、現代社会がきわめて多層的、複合的なものとして捉えられている点である。先にも確認したとおり、現代人はこのような多分化した諸々の社会的生活世界を遍歴していく「態度変更」の時代に生きていとされるのであるが、このことは、個人がその生活史においていくつもの社会集団ないし文化集団に属することを意味しており、またそれゆえに個人がその生涯にわたって内在化する現実定義の形式が一通りではないことを意味しているのである。

このようにバーガーの現実構成論を理解するうえでは、彼が現代社会を多分化した社会であると認識している点とあわせて理解することが

重要である。というのは、バーガーの現実構成論のみを単独で見えてしまうと、「つくり・つくられる人間と社会」といった場合の「社会」の意味内容が、一元的なものに見えてしまうからである。事実、彼の現実構成論においては人間と社会の関係があたかも一対一の対応関係になっているような、一元的な社会モデルを思わせる記述も見受けられる。たとえば「内在化」の説明において、社会の客観的現実と個人の主観的現実との高度の調和を想定しているような記述である⁵³⁾。しかしここで確認すべきは、現実構成論における「社会」とは現代社会において顕著であるような多分化された社会総体のことではなく、個人に先立って存在し、個人がその中に生まれ落ちる任意の生活世界のことが主に想定されていることである。バーガーの社会学の特質の一つとして、「a biographical approach」（生活史的アプローチ。P.L.バーガーとB.バーガーの共著である『Sociology』⁵⁴⁾の副題にもなっている）が挙げられるが、現実構成論でもこの「個人の生活史に即した理解」の側面が強い。それゆえ、個人にとって世界が現実的であることを保障するような知識の獲得に強調点がおかれており、個人における世界の「内在化」契機の説明を「社会化」に特化した形で論が展開されているのである。この点について彼は、以下のように述べている。

「個人は最初から社会の成員として生まれてくるのではない。彼は社会性への傾性をもって生まれてくるのであり、しかる後、社会の成員になるのである。それゆえ、どの個人の人生においてもそこには時間的な機序というものがあり、この機序を通じて、彼は社会の弁証法に導かれて参加していくのである。この過程の出発点は内在化である。すなわちそれは、客観的な出来事が意味を表

しているということの直接的な理解，ないしは解釈，つまりそうした出来事は他者の主観的過程のあらわれであり，だからこそそれは私自身にとっても主観的に意味あるものとなる，ということの理解や解釈である」⁵⁵⁾。

たしかにバーガーの言うとおりの，社会の現実を主観的にもっともなもの（plausible）として理解できてこそ，個人は有意義的な行為が可能であり，他者との世界構築という共同作業に参画できると言える。この点への強調ゆえに，現実構成論における内在化契機の説明は，まずなによりも個人にとって世界が「現実的」であることを理解させるための，「第一次的社会化（primary socialization）」の観点からの説明に力点が置かれているのである。ただしバーガーは，このように述べた上でさらに，きわめて興味深い指摘をおこなっている。それは個人が内在化の過程において世界を理解していくとき，個人は単に他者の主観的過程を理解するだけでなく，他者が住んでいるその世界をも理解するのであり，またそうすることによって他者の住むその世界が自ら自身の世界にもなるという指摘である⁵⁶⁾。

「われわれはいまや共有された状況についての相互の定義を理解するだけでなく，そうした状況を相互に定義もする。…＜中略＞…いまやわれわれの間には不断の相互現認（mutual identification）が存在する，ということだ。われわれはただ単に同一の世界に住んでいるだけでなく，それぞれの存在に参加してもいるのである」⁵⁷⁾。

先ほどから指摘しているとおりの，バーガーは現代社会が複雑に多元化している事を認識している。すなわちここにおいてこそ，現代社会においては，個人にとっての世界が「現実的」で

あり，有意味的に理解しうるものであるための要素として，バーガーが「媒介構造」論のなかで指摘するような現代社会の「正当化」の問題が立ち現れてくることになるのである。現代社会とは，かつての前近代的な社会のように，制度によって個人のアイデンティティが意味付けられ，自らの属する世界と統合的に秩序付けられる社会ではありえない。これまでに確認したとおり，アイデンティティの獲得は自らの判断によって選取られなければならないのである。ただし，上記の引用にも明らかなおとりの，このアイデンティティの獲得という問題は個人の実存的判断によってのみ行われるのではなく，他者との相互の承認によって社会的に構成されるものなのである。また逆に言えば，個人は自らのアイデンティティの獲得のみを問題とすることができず，その営みを通して他者のアイデンティティの構成にも影響を与え，その責任を持ちうることとなるのである。こうしてアイデンティティの獲得をめぐる問題圏は，単に個人の内面レベルの認知的な問題のみにとどまらず，個人が遍歴する複数の社会集団間の対立・齟齬・矛盾に関わるものとして理論化する必要が生じてくるのである。すなわち，バーガーが多元化した現代社会という社会観とともに「媒介構造」論を展開したことによって，媒介構造の具体的内実を形成する種々の社会集団間の「葛藤」という問題圏が立ち現れることとなり，バーガーが現実構成論において行ったアイデンティティレベルでの「葛藤」という指摘が，この集団間の「葛藤」という社会的行為論の文脈で捉え返すことが可能となったのである。

注

- 1) そもそもバーガーの現実構成論において示さ

れる人と社会の説明図式は、「外在化 (externalization)」－「客体化 (objectivation)」－「内在化 (internalization)」の三項図式によってであり、この「主体化」という契機が明示的に概念化されているわけではない。しかし本文でも述べているとおり、バーガーは「人と社会がともにつくり・つくられる」という弁証法的発想において社会を捉えようとしている。筆者はそのような人と社会の弁証法的構成を正しく捉えうするためには、上記の三項図式に加えて、人間の側からの新しい社会産出を示す「主体化」という契機が設定されなければならないと考えている。そしてさらに、この「主体化」契機に関して、個人の意識内において別様の現実が構想される意識的レベルと、他者との共同行為を通して現実を構成する行為的レベルの両者の次元において明確に概念化することが重要だと考えている。この「主体化」契機に関する詳しい概念設定については筆者の別稿において詳しく行っているため、別途そちらも参照されたい。なお、以下本稿において言及されている筆者の「別稿」とは、この論文のことを指している。吉田幸治「P.L.バーガー『現実の社会的構成』論における問題性と可能性」『立命館産業社会論集』第37巻第4号、立命館大学産業社会学会、2002年。

- 2) Peter L. Berger (with Thomas Luckmann), *The Social Construction of Reality*, Doubleday Anchor, [1966] 1967, p61. (山口節郎訳『日常世界の構成』新曜社、1977年、105頁)。あるいは Peter L. Berger, *The Sacred Canopy*, Doubleday Anchor, [1967] 1990, p3, (蘭田稔訳『聖なる天蓋』新曜社、1979年、4頁)。
- 3) Peter L. Berger (with Stanley Pullberg), "Reification and the Sociological Critique of Consciousness", *New Left Review*, No.35, [1965] 1966, pp69-71. (山口節郎訳「物象化と意識の社会学的批判」『現象学研究』第二号、せりか書房、1974年、112-115頁)。なお、筆者はこの論文を参照するにあたり、History and Theory版 (1965) ではなく、同内容のものが翌年に再録された上記の *New Left Review* 版を使用した。

- 4) この理論的補完の可能性という点に関しては筆者の別稿でも若干触れているが、本稿では別稿において概略的に示したこの点について、彼の現代社会論的取り組みを題材としてより詳細に検討していく事を目的としている。
- 5) Peter L. Berger, *op.cit.*, [1967] 1990, p83, (邦訳、128頁)。ただし訳語については一部、引用者が変更を加えた。
- 6) *Ibid.*, p84, (邦訳、129頁)。ただし訳語については一部、引用者が変更を加えた。
- 7) この「態度変更 (alternation)」について、バーガーは『社会学への招待』の補論「態度変更と生活史」において詳しく論じており、態度変更が活発となる主な要因として現代社会における個人の地理的移動や社会的移動の増大を挙げている。Peter L. Berger, *Invitation to Sociology*, Doubleday Anchor, 1963, p57. (水野節夫、村山研一訳『社会学への招待』思索社、1979年、86頁)。また、『招待』での「態度変更」の説明と同内容の記述が『故郷喪失者たち』にも見いだすことができ、そこでは現代人が「改宗を重ねる傾向 (conversion-prone)」をもち、「生活史 (biography) とは、さまざまな社会的世界の間の移住 (migration) や、いくつかの可能なアイデンティティをつぎからつぎへと実現すること」とされている。Peter L. Berger (with Brigitte Berger and Hansfried Kellner), *The Homeless Mind*, Random House Vintage, [1973] 1974, p77. (高山真知子、馬場伸也、馬場恭子訳『故郷喪失者たち』新曜社、1977年、86頁)。なお、本脚注における上記引用文中の訳語については、引用者が一部変更を行った。
- 8) *Ibid.*, [1973] 1974, pp77-79. (邦訳、86-88頁)。なお、reflectiveの訳語については引用者が変更を行った。
- 9) ここで言う共著者達とは、P.L.バーガーとともにこの『故郷喪失者たち』を執筆しているハンスフリード・ケルナーとブリジット・バーガーである。以下本章で述べる「バーガーら」「彼ら」とは、P.L.バーガーとこの二者のことである。なお、本稿にて「バーガー」と言った場合は全て、ブリジット・バーガーではなくP.L.バ

ーガーを指している。

- 10) Peter L.Berger (with Brigitte Berger and Hansfried Kellner) , *op.cit.*, [1973] 1974, p72. (邦訳, 80頁)。ただしこの訳語は引用者によって変更されている。訳書では「biography」という用語を「生活歴」と訳出している関係で、この「a life plan」を「生活歴設計」としているようであるが、引用者は「biography」という用語を「生活史」と訳出しており、これとの関係で「生活史設計」という訳語を採用した。
- 11) *Ibid.*, p24. (邦訳, 26頁)。
- 12) *Ibid.*, p24. (邦訳, 26頁)。
- 13) *Ibid.*, pp42-43. (邦訳, 47-48頁)。
- 14) *Ibid.*, pp111-113. (邦訳, 127－129頁)。バーガーらは、工業生産の内在的な特性が人々の意識へと「波及」し、近代的意識の形成に影響を与えるとされる様々な諸特性を挙げているが、なかでもここで挙げた六点のものが特に強く「波及しうる (transferable)」ものとされ、近代の象徴的な世界観を構成しうるものとされている。例えば工業生産のプロセスがもたらす「寄木細工性 (componentiality)」という現実認識のあり方は、「現実とは、因果関係や時間、空間という構造の中で互いに関係しあっている明らかに分解可能な構成分子によって成り立っている、と理解されている」(p.112, 邦訳127頁) 現実認識のあり方である。そしてそのような現実認識のあり方は、本来の工業生産の領域のみならず、その制度的文脈から離れて他の領域における現実定義のあり方をも規定することになるのである。また「多相関性 (multi-relationality)」という現実認識のあり方も、人々が工業生産のプロセスに関与するなかで、「意識の中に実にさまざまな関係—他者との、物体との、抽象的実体との—を保持していなくてはならない」(p.112, 邦訳127頁) ことを理解するような意識のあり方であり、これもまた近代社会における象徴的世界の構成要素となっているのである。
- 15) *Ibid.*, pp113-115. (邦訳, 129－131頁)。上記と同じく、官僚制がもつ諸特性のうち特に強く意識へと働きかけ、近代的な世界観を形作るものとして、ここで挙げられている四点のものが

指摘されている。例えば①の「社会そのもののテーマ化」とは、官僚制のもとでは社会が組織されなければならない無定形の現実として経験され、そして実際に操作可能な世界として理解されることを意味しているものであり、このような官僚制的な世界理解の波及によって近代の象徴的世界が形作られるとされるのである。

- 16) *Ibid.*, p66. (邦訳, 73頁)。
- 17) *Ibid.*, p82. (邦訳, 91－92頁)。
- 18) *Ibid.*, p64. (邦訳, 71頁)。
- 19) *Ibid.*, p65. (邦訳, 72頁)。
- 20) *Ibid.*, p184. (邦訳, 213－214頁)。ただし引用文中の訳出に関しては、引用者が一部変更を行った。
- 21) *Ibid.*, pp185-186. (邦訳, 215－216頁)。
- 22) *Ibid.*, p186. (邦訳, 216頁)。
- 23) *Ibid.*, p186. (邦訳, 216頁)。
- 24) *Ibid.*, p186. (邦訳, 216頁)。
- 25) *Ibid.*, pp186-187. (邦訳, 216－217頁)。
- 26) *Ibid.*, p187. (邦訳, 217頁)。
- 27) ここにおいて筆者のいう「現代社会」、あるいは「現代人」とは、基本的に原著書でいわれている「modern world」や「modern man」を指している。ただしこの補論においては「前近代的 (premodern)」な世界との対比で論が展開されているため、引用文等において「近代」の訳語も併用している。
- 28) *Ibid.*, p85. (邦訳, 98頁)。
- 29) *Ibid.*, p85. (邦訳, 98頁)。
- 30) *Ibid.*, pp86-87. (邦訳, 99頁)。
- 31) *Ibid.*, p87. (邦訳, 100頁)。
- 32) *Ibid.*, p87. (邦訳, 100頁)。
- 33) *Ibid.*, p88. (邦訳, 101頁)。
- 34) *Ibid.*, p88. (邦訳, 101頁)。
- 35) *Ibid.*, p88. (邦訳, 102頁)。
- 36) *Ibid.*, p95. (邦訳, 109頁)。
- 37) *Ibid.*, p95. (邦訳, 109－110頁)。ただし引用文中の訳出に関しては、引用者が一部変更を行った。
- 38) *Ibid.*, p95. (邦訳, 110頁)。彼らはこの同じ箇所において、このような近代的価値として認められるその他多くの例を挙げている。すなわち

「民族的人種の抑圧とすべての形態の奴隷制の排斥」,「拷問の忌避から皆殺しの罪の条文化に至るまでの、残虐に対する新しい配慮」,「ベトナム戦争の残虐さに対するあの怒りのなかで政治的に重要な意味をもつにいたった感性」等々である。

- 39) *Ibid.*, p96. (邦訳, 110頁)。
- 40) *Ibid.*, p96. (邦訳, 110頁)。
- 41) *Ibid.*, p96. (邦訳, 111頁)。
- 42) *Ibid.*, pp18-19. (邦訳, 18頁)。
- 43) *Ibid.*, p225. (邦訳, 263頁)。
- 44) ここでの「バーガーら」とは、P.L.バーガーとその共著者であるR.ノイハウスのことである。
- 45) Peter L.Berger (with Richard Neuhaus), *To Empower People*, second edition, Michael Novak(ed.), The AEI press, [1977] 1996, p148.
- 46) *Ibid.*, p158.
- 47) *Ibid.*, p159.
- 48) *Ibid.*, pp148-149.
- 49) *Ibid.*, pp159-160.
- 50) *Ibid.*, p163.
- 51) *Ibid.*, pp152-153.
- 52) *Ibid.*, p153.
- 53) Peter L.Berger (with Thomas Luckmann), *op.cit.*, [1966] 1967, p163. (邦訳, 276頁)。なおこのような問題性をめぐる論点については、先に述べた筆者の別稿（吉田幸治, 2002年）において詳しく論じている。
- 54) Peter L.Berger (with Brigitte Berger), *Sociology: A Biographical Approach*, Basic Books, [1972] 1975. (安江孝司, 鎌田彰仁, 樋口祐子訳『バーガー社会学』学習研究社, 1979年)。
- 55) Peter L.Berger (with Thomas Luckmann), *op.cit.*, [1966] 1967, p129. (邦訳, 219頁)。
- 56) *Ibid.*, p130. (邦訳, 220頁)。
- 57) *Ibid.*, p130. (邦訳, 220頁)。

文献リスト

- Peter L.Berger, *Invitation to Sociology*, Doubleday Anchor, 1963. (水野節夫, 村山研一訳『社会学への招待』思索社, 1979年)。
- Peter L.Berger (with Stanley Pullberg), “Reification and the Sociological Critique of Consciousness”, *New Left Review*, No.35, [1965] 1966, pp56-71. (山口節郎訳「物象化と意識の社会学的批判」『現象学研究』第二号, せりか書房, 1974年, 94-117頁)。
- Peter L.Berger (with Thomas Luckmann), *The Social Construction of Reality*, Doubleday Anchor, [1966] 1967. (山口節郎訳『日常世界の構成』新曜社, 1977年)。
- Peter L.Berger, *The Sacred Canopy*, Doubleday Anchor, [1967] 1990. (藺田稔訳『聖なる天蓋』新曜社, 1979年)。
- Peter L.Berger (with Brigitte Berger), *Sociology: A Biographical Approach*, Basic Books, [1972] 1975. (安江孝司, 鎌田彰仁, 樋口祐子訳『バーガー社会学』学習研究社, 1979年)。
- Peter L.Berger (with Brigitte Berger and Hansfried Kellner), *The Homeless Mind*, Random House Vintage, [1973] 1974. (高山真知子, 馬場伸也, 馬場恭子訳『故郷喪失者たち』新曜社, 1977年)。
- Peter L.Berger (with Richard Neuhaus), *To Empower People*, second edition, Michael Novak(ed.), The AEI press, [1977] 1996.
- Peter L.Berger, *Facing up to Modernity*, Basic Books, 1977.
- Peter L.Berger (with Thomas Luckmann), *Modernity, Pluralism and the Crisis of Meaning*, Bertelsmann Foundation Publishers, 1995.
- 吉田幸治「P.L.バーガー『現実の社会的構成』論における問題性と可能性」『立命館産業社会論集』第37巻第4号, 立命館大学産業社会学会, 2002年, 195-219頁。

On P.L.Berger's Theoretical Work on "Mediating Structures": A Study of "Active Subjectivity" in P.L.Berger's Sociology.

YOSHIDA Koji *

Abstract: In this paper, I take up P.L.Berger, a prominent phenomenological sociologist in America, and review his book *The Homeless Mind* and some of his books published after the 1970s, which develop his theoretical analysis about the modern world. Through this review, by closely examining his central social theory "The Social Construction of Reality", I make it clear that Berger has some theoretical concepts about human "active subjectivity" in his work on "Mediating Structures". Concerning "The Social Construction of Reality", Berger envisioned his own theory as a dialectical one that could dynamically grasp the relationship between man and society. But his theory has a tendency to overemphasize cognitive aspects because the "dialectic" that he presents supposes "conflicts" imprecisely. For that reason, Berger's social theory about man and society does not necessarily succeed in grasping a moment of human "active subjectivity". On the other hand, in his analytical work about the modern world, there are some theoretical concepts concerning human "active subjectivity" that indicate a human production of society. Especially in his work on "Mediating Structures", Berger changes an object of study toward actual intermediate groups. By this change, Berger's sociology can not only deal with human consciousness but also with social actions.

Keywords: mediating structures, a moment of "active subjectivity", public sphere and private sphere, legitimation

* Graduate Student, Graduate School of Sociology, Ritsumeikan University